

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 哲学対話のツールを求めて  |
| Author(s)    | 会沢, 久仁子   |
| Citation     | 臨床哲学のメチエ. 10 P.32-P.33  |
| Issue Date   | 2002  |
| Text Version | publisher   |
| URL          | <a href="http://hdl.handle.net/11094/5743">http://hdl.handle.net/11094/5743</a> |
| DOI          |   |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 哲学対話のツールを求めて

会沢久仁子

まずお知らせを二つ。

・ロンドンの小学校におけるSDの取り組みについて資料を入手した。福井高校などの哲学の授業にSDを取り入れていくための参考になると思う。「子どもとともにする哲学」の雑誌も見つけたので、購入したい。

・会議の後、ロンドンのセント・クリストファー・ホスピスを訪問した。近代ホスピス発祥の場所としてとても有名なホスピスである。ホスピス運動の創始者、シシリー・ソングラスさんにもお会いすることができた。ホスピスケアの倫理や死の教育の本や資料もいろいろ購入した。関心のある方は声をかけてほしい。

1 .Margit LeutholdとBeate Littigによるワークショップ「コミュニティにおける病院 パストラルケアとネオ・ソクラティック・ダイアログ」

彼女たちが行っている、パストラルケアに関わる人たちに対するSDの方法を用いた研修プログラムの紹介と、そのプログラムのうちの哲学的問いを見つけるグループワークを体験して検討するというもの。

問いを見つけるグループワークは、一グループ4人程度で、各自の経験例と具体的な問い(第一階の問い)を出し合い、

そこから経験的ないし一般的問い(第二階の問い)を作り、さらに哲学的な問い(第三階の問い)を作る。生死、病に関して人が直面した問題に耳を傾け、問いを作りながらそのような問題を扱うことができた。

このようにさまざまな経験から問いを見つけ、定式化することは、自分自身が問題に直面したや、問題を抱えた人々を援助するときに重要であろう。その意味で、経験から問いを見つける訓練としてこのグループワークは有効だと感じた。具体的な問題から一般的、哲学的問いを見出すことは、具体的な問題を明確にし、整理することになるし、自分が苦しんでいる問題であってもそれを対象化することができる。だから、話を聞いて、直面している問題から哲学的問いを見出すことだけでも、「哲学的傾聴」や「哲学的援助」になるかもしれないと考えた。経験から哲学的問いを見出す練習は、哲学の練習としても、精神的援助のトレーニングとしても、カウンセリングの一方法としても、教育や援助に使えと思った。

2 .Horst Gronkelによる短縮SDと、KopfwerkグループによるSD方法論ワークショップ

ホルストは、議論を短時間で抽象的レベルに導くことをねらって、構造化されたSDの進行を約3時間でやって見せ、その進行方法について参加者で議論した。

ホルストの進行は、例とテーマとの関連を考えさせながら、例をわずかしき出さずに選ばせ、例の記述も進行役が提示する要点について行った。そして例提供者の判断に関して、参加者は例提供者の判断の背後にある信念を探し、さらに参加者に共通の根本的な信念を探す。

確かに実際に議論は抽象的レベルに進んだが、内容の吟味は不十分に感じた。議論に疑問を感じてもそれを考えて表現する余裕がないし、たとえ疑問や反論を出しても、中心的な議論に集中するため、それらは脇に置いておかれる傾向にあった。

短時間SDをどう進行するかはSDをやっていくために重要な事柄であり、ホルストは短時間で抽象的レベルに到達することをねらった。しかし私は、異なる意見とそれらの関連の吟味も哲学をするためには欠かせず、抽象化よりもこちらを重視するほうが面白く、哲学的で、発見的な議論になると感じた。

KopfwerkのSD方法論ワークショップは、SD進行役のためのよく工夫されたトレーニングを提供してくれた。私は、SDが共同で哲学をするためのツールである

ことを再確認し、SDの方法をさらに研究していく必要があると感じた。哲学するためのツールはとても重要である。SDなどのおかげで私たちは哲学を学ぶ者として他の分野の人たちとの交流がずっと容易になる。このワークショップ自体が学習を活性化させるツールおよび方法としての工夫に富んでおり、SDや哲学の授業に取り入れていくことができると思った。なお、堀江さんと本間さんもこのワークショップに参加したので、お二人の感想も参考にしてほしい。

最後に、日本で「ソクラティック・ダイアログ」と口にする、一般の人には通じにくく、哲学者にはソクラテスの対話そのものをイメージさせるので、Socratic Dialogueをどう訳したらよいか考えている。「ソクラテス・ワークショップ/グループワーク」とか、「ソクラテス・ディスカッション」と呼ぶのがよいのではないか。（あいざわくにこ）



皆で歌った最後の夜（イギリスフォトアルバム6）